

令和 2 年度 宮城県産業教育審議会会議録

宮城県教育委員会

- I 日 時** 令和 3 年 3 月 1 2 日 (金)
午後 3 時 3 0 分から午後 5 時 1 5 分まで
- II 会 場** 宮城県 行政庁舎 特別会議室
仙台市青葉区本町 3 丁目 8 - 1
- III 次 第**
- 1 開会
 - 2 開会の挨拶
 - 3 委員委嘱
 - 4 議 事
 - (1) 令和 2 年度宮城県産業教育審議会委員について
 - (2) 専門高校・専門学科のあり方に関する検討について
(専門高校と専門学科の現状と課題)
 - 5 その他
今後の日程について
 - 6 閉 会

【資料一覧】

- 資料 1 産業教育振興法 (抜粋)
産業教育審議会条例
情報公開条例 (抜粋)
- 資料 2 専門高校・専門学科のあり方に関する検討について
(専門高校と専門学科の現状と課題)
- 資料 3 中学校卒業生見込数及び必要学級見込数について
- 資料 4 提言 今後の専門学科・専門高校の目指すべき方向性 (平成 2 9 年 3 月)
- 資料 5 第 3 期県立高校将来構想 (平成 3 1 年 2 月)
- 資料 6 第 3 期県立高校将来構想 第 1 次実施計画 (令和 2 年 7 月)

[別資料]

- ・宮城県産業教育審議会委員名簿

進行
事務局 伊藤裕之

委員の皆様、本日は御多用のところ、御出席をいただきまして誠にありがとうございます。開会に先立ちまして、本審議会は情報公開条例19条に基づき、公開となりますので、よろしく願いいたします。

ここで本日の資料並びに日程の説明をさせていただきます。

資料は、「本日の次第が表紙となった冊子」、資料1として「産業教育振興法が表紙にある冊子」、資料2「県内の専門高校・専門学科の在り方に関する検討について」、資料3「中学校卒業生見込数及び必要学級見込数について」、資料4「提言 今後の専門学科・専門高校の目指すべき方向性」、資料5「第3期県立高校将来構想 平成31年2月」、資料6「第3期県立高校将来構想 第1次実施計画 令和2年7月」となっております。

本日の日程は、お配りしております次第のとおりでございます。終了時刻は17時15分を予定しておりますのでよろしくお願いいたします。

1 開会
進行
事務局 伊藤裕之

それでは、只今から、令和2年度宮城県産業教育審議会を開催いたします。開会挨拶になりますが、ただいま教育長につきましては議会対応しておりますのでこちらに戻り次第ご挨拶いたします。

続きまして、本日御出席の皆様につきまして、お手元の名簿順に御紹介させていただきます。

- ◇宮城県商工会議所連合会常任幹事 今野 薫 委員でございます。
- ◇宮城県農業協同組合中央会常務理事 高橋 慎 委員でございます。
- ◇宮城県専修学校各種学校連合会副会長 佐藤 直由 委員でございます。
- ◇東北大学大学院 農学研究科 副研究科長
教授 伊藤 房雄 委員でございます。
- ◇宮城学院女子大学 現代ビジネス学部 現代ビジネス学科
教授 宮原 育子 委員でございます。
- ◇東北福祉大学 総合福祉学部 社会福祉学科
准教授 後藤 美恵子 委員でございます。
- ◇東北大学 金属材料研究所
教授 梅津 理恵 委員でございます。
- ◇宮城県経済商工観光部次長 佐藤 靖彦 委員の代理として、
産業人材対策課 阿部貴夫 参事兼課長でございます。
- ◇宮城県高等学校長協会より
宮城県松山高等学校長 徳能 順子 委員でございます。

なお、大内 仁 委員、三浦弘子 委員、梨本雄太郎 委員は本日欠席でございます。

3 委員委嘱

次に 3 委員委嘱 について、事務局からお願いします。

事務局 伊藤直美

本日が今年度初めての審議会ですので、委員の皆様の委嘱状を机上に配付させていただきました。本日は時間が限られていることから、これをもって委嘱に代えさせていただきますと思います。

事務局 伊藤裕之

それでは、これより審議に入りますが、資料1の2ページにあります産業教育審議会規則第5条により、本審議会の会長が議長を務めることになっておりますが、新たに委嘱された最初の審議会となりますので、事務局が進行させていた

できます。それでは事務局お願いいたします。

4 議事

事務局 伊藤直美

それでは、議事の(1)令和2年度宮城県産業教育審議会委員について説明いたします。

お手元の資料1の2ページをご覧ください。産業教育審議会規則第4条により、本審議会の会長及び副会長を、委員の皆様の互選で決定するということになっております。御希望などについてはいかがでしょうか。

(「事務局案を」との声)

事務局で案を用意させていただいております。

事務局案としましては、会長を伊藤房雄委員に、副会長を今野薫委員にお願いしたいという原案でございます。いかがでしょうか。

(委員より「異議なし」の声)

異議なしの声がありましたので、会長を伊藤房雄委員に、副会長を今野薫委員にお願いしたいと思っております。どうぞよろしくをお願いいたします。

それでは、伊藤会長から御挨拶をいただきたいと思っております。よろしくをお願いいたします。

伊藤房雄 会長

ただいま本審議会の会長を仰せつかりました東北大学大学院農学研究科の伊藤でございます。会長就任にあたりまして、御挨拶を申し上げます。本審議会ですが、県の産業教育の振興を図るため、教育委員会からの諮問に応じて産業教育に関する教育の内容や関連産業界との協力など、産業教育全般について審議し、提言や答申という形でお答えするものであります。

本審議会では4年前の平成29年3月にお手元の資料4にございますように、今後の専門学科・専門高校の目指すべき方向性を提言するなど、宮城の産業教育の在り方についてお答えする本審議会の役割は非常に大きいものと理解しております。本日は、県内の専門高校・専門学科の現状について事務局から詳細な説明があると聞いております。4年前の提言を受けて、その後その提言の内容の検証ということで本審議会はそのま役割を果たしていくのかなと私自身思っておりましたが、本日の説明を聞いていただければわかると思っておりますが、10年後を見据えると、非常に今、宮城県の産業教育が大きな転換点にあるのだと御理解いただけるかと思っております。そういう点で、委員の皆様には、現状をまずは御理解いただく今日は非常に良い機会であると考えております。コロナ禍で社会情勢が大きく変化している今日、宮城県の産業教育も岐路を迎えていると考えてもおります。委員の皆様には、将来の産業を支える、人材育成の支援となるようそれぞれ御専門の立場から忌憚のない御意見をいただきますよう、お願いして私の御挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくをお願いいたします。

進行

事務局 伊藤裕之

ありがとうございました。この後は、産業教育審議会規則第5条により、会長が議長を務めることになっておりますので、ここからの進行を伊藤会長にお願いしたいと思います。よろしくをお願いいたします。

議長 伊藤会長

それでは、議事進行を務めさせていただきます。

本日次第にありますように、4議事、大きく2つの議事が準備されております。1番目のところは現在、委員の紹介、会長・副会長の選出で終えたと思っております。続いて(2)の専門高校・専門学科の在り方に関する検討についてといったことで、最初に事務局から説明をお願いいたします。

事務局 伊藤直美

(1 検討の目的)

それでは資料2の専門高校・専門学科の在り方に関する検討について、という資料を基に御説明させていただきたいと思っております。1ページ目をお開きください。今回専門高校・専門学科のあり方を検討する目的について御説明します。

資料2の1ページにありますように、本審議会では東日本大震災からの復興に向けたあり方について平成24年3月に答申を頂き、最近では資料4にあるとおり平成29年3月に提言をいただき、その提言に基づいて各校教育活動を展開しておりました。

しかしながら、御存知のとおり宮城県では少子化が急激に進展し、中学校卒業予定者が年々減少傾向にあるため、高校の学級減等が必要になってきています。また、後ほど御説明しますが、中学生の普通科志向や私立の実質無償化等の影響もあるかと思うのですが、特に郡部にある専門高校・専門学科は入試倍率の低下が顕著に現れています。

さらに、昨年来のコロナ禍によりまして、学校を取り巻く状況も大きく変化しております。

このような社会状況の変化を踏まえ、本県の専門教育のあり方について改めて検討する必要があることから、次年度令和3年度に県教育委員会からこの産業教育審議会へ諮問を考えております。

そこで、本日この審議会におきましては、専門高校・専門学科の現状と課題について私どもで整理しましたので、委員の皆様には、率直な御意見を頂きたいと思っております。そして本日頂いた御意見をもとにして、来年度の諮問に向けた準備を進めていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

(2 専門教育の方向性についての提言・答申等)

それでは続けて、2ページ目です。最近の専門教育の方向性についての提言・答申等について簡単に御説明します。

まず、この宮城県産業教育審議会からは、別冊の資料4にありますとおり、平成29年3月に、提言をいただいております。この資料2の2ページの中ではそのポイントをまとめておりますが、専門教育のあり方について、志教育の推進、上級学校や外部人材との連携を重視した職業教育の充実、起業家的資質・能力やグローバルな視点で捉える力の育成、多様な価値観を持った人との連携・協働などといった視点から、地域振興と地域産業の発展を支える人材の育成が大きな方向性として示していただきました。

次に別冊の資料5にあります「第3期県立高校将来構想」です。ここでは、今後10年間の高校教育改革の方向性が示されており、対象が普通科や定時制も含めた全部の県立高校になります。その中でも特に、専門学科に関する記載内容をまとめたものが資料2の3～4ページです。ここでは大きく専門学科全体と、農業・工業・商業・水産・家庭・看護・福祉の各学科、そして総合学科について目指すべきあり方が示されました。

さらに、資料2の4ページになりますが、学校配置の考え方として、活力ある教育環境の確保を図るため、適正な学級規模を1学年当たり4～8学級を目安とすることが示されております。

また、この第3期県立高校将来構想の第1次実施計画が昨年7月に策定され、その中では、再編等の基本的な考え方や、再編を行う上での観点が示されております。

(3 専門学科の学科改編の経緯)

そして、専門学科を有する学校は宮城県でどのような配置状況になっているか、ということにつきましては、5ページの地図上にございます。こちらは、私立、あるいは仙台市立の学校も含めた配置状況になっております。

そして6ページではその中でも公立の県立高校の設置学科を一覧にしております。

また、7ページでは、平成10年度以降の専門高校等の学科改編状況をまとめました。

最近の学科改編としましては、平成27年度に登米地区の4つの高校を再編統合して登米総合産業高校が開校しました。

また、今後予定されているものとして、令和5年度に柴田農林高校と大河原商業高校を再編統合し、南部地区職業教育拠点校が開校する予定となっております。

この後は各専門学科の検証ということで、学科別の取組の成果と課題、あるいは特色ある学科づくりの内容について御説明することになっております。どうぞよろしくお願いいたします。

(4 専門学科の検証(1) 学科別の取組の成果と課題)

(農業科)

それでは、専門学科の検証につきまして、はじめに農業科の取組の成果と課題について、御説明いたします。資料8ページを御覧下さい。

現在、農業に関する学科は7校に設置しており、それぞれの学校では、地域や各産業界と連携した教育の実践をとおして、次代を担うスペシャリストの育成を図っております。

特に、企業や関係機関と連携した六次産業化による商品開発については、全ての学校で取り組んでおり、学びの深化による学校ブランドの育成にも繋がっているところであります。

また、GAP教育の推進については、令和4年からスタートする新学習指導要領の中でも関連する科目で「GAPをする」ことが示されております。

このことから、教職員における指導員の養成を図るとともに、昨年度は加美農業高校が「米」でJGAPの認証を受け、更に今年度につきましては、県農業高校が「トマト」で県内農業高校初となるAS I AGAPで認証を受けております。今後も引き続き、生産工程管理に努めるようGAP教育の充実を図って参りたいと考えております。

一方で、課題としては、少子化に伴い入学者数が減少しております。昨今のペットブームにより女子の入学者については、年々増加傾向にありますが、多くの学校で充足率を満たしていない状況にあります。

今後は、「スマート農業」の実践により、一層の教育内容の充実を図るとともに、農業の魅力の小・中学生及び保護者にPRすることが重要であることから、関係機関との連携を更に強化して参りたいと考えております。

(水産科)

続きまして、水産科の取組の成果と課題について、御説明いたします。資料につきましては、14ページになります。

現在、水産に関する学科は2校に設置しております。水産教育をとおして専門的な知識・技術の習得に努めるとともに、地域や各産業界との連携により、魅力ある学校づくりに努めております。

特に、高大連携事業や企業との協働による商品開発については、各校で高い実績を挙げており、今後の共同研究等についても成果が期待されているところであります。また、次代を担う人材育成につきましては、2校共に海技士養成施設として認可されており、各種資格取得の推進を図っております。更に、7代目となる「宮城丸」の建造が始まっており、今後、海洋実習の一層の充実により、グローバル化に対応したスペシャリストの人材育成が期待されております。

事務局 伊藤裕之

課題としては、農業科同様に入学者の確保が挙げられており、持続的な担い手の確保及び育成が急務となっています。これまでも、「小学生への出前授業」や「宮城丸の開放」などにより、地域に開かれた学校づくりに取り組んで参りましたが、引き続き、小・中学生や保護者等に対して水産・海洋教育の魅力をPRし、豊かな人間性を持った産業人材の育成に努めて参りたいと考えています。

(総合学科)

続きまして、総合学科の取組の成果と課題について、御説明いたします。資料21ページを御覧ください。

総合学科は第3の学科として、平成6年に全国で初めて設置されました。現在、本県では7校が多様な学びの中から科目選択し、将来の進路希望を達成すべく、主体的な学習展開を図っております。

その中で多くの学校が系列連携や地域連携による取組を推進し、探究型学習の充実により、学びの深化を図っています。特に、「産業社会と人間」、「総合的な探究の時間」等の履修により、自己理解に努めるとともに、将来の生き方や働き方、更には進路について考えるキャリア教育の充実にも発展しております。

課題としては、系列毎に多様な学びを展開しているものの、生徒が目的意識や将来の目標についての自覚の欠如が挙げられます。総合学科の就職内定率については、他の専門学科よりも低い傾向にあり、生徒の主体性が進路希望の達成につながっていない状況が見られます。

今後は、総合学科の最大の魅力である、生徒の多様な興味・関心、進路希望等に応じて、幅広い選択科目を開設し、更に魅力ある科目開設を進めることが必要であります。

また、地域における、優れた専門的知識・技能を持つ社会人講師の積極的な活用や大学等と連携・協働した高大連携事業の実施等により、将来の生き方や進路、あるいは科目選択に関わる指導の充実を図ることが重要と考えております。

事務局 長田晃明

(工業科)

続きまして、工業科について御説明いたします。資料10ページを御覧ください。

現在、工業の学科は8校に設置しており、総合学科を含めると11校であります。それぞれの学校においては、地域の産業界、大学、県立の高等技術専門校、地域の行政機関などと連携した教育の実践をとおして、地域産業を担う技術・技能者の育成を図っております。

特に、みやぎ発展税を活用した「みやぎクラフトマン21事業」や産業廃棄物税を活用した事業においては、地域企業等の技術・技能者から指導を受け、工業系の資格取得やものづくり大会での活躍、市町の施設の設計や観光設備の設置、地域祭での子供たちへのものづくり教室の開催など、単に技術・技能を身につけるのではなく、将来の地域産業を担う志を持った人材の育成に努めております。

成果としましては、資料に記載のとおりでありまして、どの学校でも地域との連携体制を構築し、様々な取組を実践することができるようになり、生徒の学びを深めることにつながっております。また、毎年多くの生徒が、製造業をはじめとした様々な工業系の企業等に就職しております。

一方で、課題としましては、各校とも工業のベーシックな学びの取組、たとえば溶接とか旋盤とか電気工事になりますが、それらについてはほぼできているという状況にありますが、その一方で、地域の特色ある分野のものづくり技術にはまだまだ対応できておりません。

そのため、パートナーシップ会議などを積極的に設置し、各地域の産業の特色に応じた人材育成を行い、地域を大切に考える人材を輩出する必要があると考

えております。

さらに、定員割れの学校が多くなっており、何らかの対応を考えていくことが急務であります。引き続き、富県宮城を支える人材の育成に努めたいと考えます。以上でございます。

事務局 吉田浩二

(商業科)

続いて商業科の取組の成果と課題について、御説明いたします。

資料は12ページになります。

現在、県立高校で商業に関する学科を設置しているところは単独商業高校4校、併設校5校の計9校となっています。その他仙台市立が1校ございます。

この成果のところを御覧いただきたいのですが、「地域の企業と協働した商品開発」では、大河原商業高校の地元特産のゆずを練り込んだ「うーめん」などの他、松島高校観光科では1泊2日の「松高おもてなしツアー」、比較的交通の便が良くない志津川高校は海産物のパック商品をインターネットを介して販売するなど、地域の特性に合わせた学びを展開しています。

また、商品開発を行うだけではなく、自分たちが開発した商品の権利を守る学習として、知的財産の学習も行っており、実際に一迫商業、大河原商業などは商標登録まで行っております。

また、成果の(キ)(ク)にあるように、資格取得を生かした大学進学も積極的に行っており、上級学校に進学しさらに専門的な学びを深め、就職するという生徒も多くおります。

(ケ)その他特色ある取組としては、それぞれが学んだ学習成果をそれぞれの地域のイベントで発表するほか、単独商業高校が一同に集まり、販売イベントを通じた成果発表会を「商業高校FESTIVAL」として、仙台エスパルを会場に開催したり、全国の商業高校の開発商品を仕入れ、販売する「石商マーケット」等の取組も行っております。

課題としましては、小中学校の児童生徒、保護者、教員に対して、商業高校の魅力を発信しきれていないと考えられ、主体的に商業教育を学びたいと思いつく生徒の増加に繋がっていないのではないかと考えられます。そうしたことから、学校評価アンケートによる「学校生活の充実度」の数値を見ても、肯定的回答の割合が決して低くはありませんが、農業や工業と比較しやや低めとなっております。

また、専門的な就職や、大学の推薦入学等で評価される高度資格取得者については、年度によりばらつきは若干あるものの、減少傾向にあります。生徒自体が減っているという現状にあり、率としてはそれほど減少していないかもしれませんが、高度資格取得による推薦条件等を満たす生徒の絶対数は減少しているという問題もみられます。

商業科については以上です。

事務局 武田英子

(家庭科)

次に、資料16ページを御覧ください。家庭科について御説明いたします。

家庭科の専門学科では、地域の関係機関と連携した体験活動や産業界と連携した商品開発及び販売、小学校・高校間等での校種を超えた教育活動の展開など、地域と関わる実践的な取組を行っております。

成果としましては、2学年から食物、被服、保育・福祉の学習をコース制にすることで、専門性を深化させ、資格取得や希望進路の実現につなげていることです。特に、高等学校家庭科技術検定の資格取得を目指し、被服製作や食物調理、保育に関する基礎知識と技術の習得を通じて、チャレンジ力・段取り力・創造力・忍耐力など多様な社会に適応できる資質・能力の醸成に努めております。また、

文化祭などで成果発表することにより、生徒は学ぶ意欲を向上させ、高度な知識・技術の習得と自信につなげております。

課題は、家庭科の専門学科を有する3校が様々な取組を展開しておりますが、それぞれの学校の学びの特徴を小・中学生などに十分アピールできていないことです。

今後は、それぞれの専門学科の学びの魅力をさらに発信していくとともに、職業人としての意識・態度・能力の育成につなげることを意識した学びの展開がさらに必要であると考えております。

(看護科)

次に、資料の18ページ 看護科について御説明いたします。

県内唯一の5年一貫の看護科を設置している白石高校では、准看護師試験は100%、看護師国家試験でも高い合格率を維持し、看護師に求められる知識や看護実践力の定着を重視した教育活動は、確実な成果を上げています。実務経験を積みながら、さらに高度な知識や技術・技能を身に付け、専門的職業人としてスキルアップを図っていきたいと考える生徒が多く、先端の医療技術、設備の整った環境を求め、総合病院や専門病院に就職する傾向が高いことに加え、助産師や保健師の資格取得のための進学者もおります。

看護の学びの要となる病院での臨地実習は、5年間で945時間、日数にして120日以上実施することが必須となっておりますが、年々、実習先の確保が困難な状況にあります。臨地実習先への就職が多く、実習での学びが就職につながっている実績から、看護人材確保には実習先の提供が有効であることを関係機関にご理解いただくとともに、地域の協力を受けながら地元の医療機関の魅力を伝える一層の取組が課題であると考えます。

(福祉科)

次に、資料19ページ、福祉科について御説明いたします。

介護職唯一の国家資格である介護福祉士の養成校は、県立では登米総合産業高校と迫桜高校の2校になります。

養成校の最も大きな成果は、介護福祉士国家試験に合格した生徒は100%、介護や医療の分野に就職または進学していることです。しかし、一方で、介護福祉士養成校への入学者は減少傾向にあります。

また、旧ホームヘルパー2級相当の資格で、修了により訪問介護ができる介護職員初任者研修を実施している学校は資料にありますように9校ありますが、修了者で就職した生徒のうち、約4割が介護職以外に就職しています。

以上のことから、介護職の求人はあるものの福祉系高校への入学者が減少傾向にあることや、介護職員初任者研修修了者で就職した生徒の約4割が介護職に就いていないことが課題としてあげられます。

今後は、保健福祉部や地域の協力を得ながら、福祉職の魅力を伝える一層の取組が必要であると考えます。

(4 専門学科の検証 (2)再編統合による専門教育の体制整備の成果と課題)

(登米総合産業高校)

続きまして、(2)再編統合による専門教育の体制整備の成果と課題について、説明いたします。資料23ページを御覧ください。

この再編統合による専門教育の体制というのは、登米総合産業高校のことでございまして、登米総合産業高校は、専門学科の複数学科融合型として、既存の農業、工業及び商業の学科に新設の福祉科を加え、平成27年度に開校しました。農業科、機械科、電気科、情報技術科、商業科及び福祉科の6クラス編成で

あり、県内初めてのタイプの学校となります。

特色としましては、それぞれの専門学科の学びを共有するため、1年次においては科目「産業基礎」、2年次においては科目選択制の「総合選択システム」により他学科の学びにも触れ、また、科目「企業実践」により、生徒が地域課題について産業や専門技術等を関連させながら広い視野でとらえ、解決に向け主体的に取り組んでいくことで、独創的な発想力や豊かな創造性を身につけさせるというものです。

また、地域連携と産学官連携を深めるために、地域パートナーシップ会議を設け、地域に根ざした実践的な教育活動の展開を図るために必要な助言・支援をいただき、協働して教育活動を行っております。

成果としましては、他学科の学びを通し、地域と連携して教育活動に取り組んだことで、生徒がより広い視野を持ち、地域で生きる自らの将来や役割を自分事として考えるようになってきたことであります。それにより、高い地元就職率を達成しており、持続可能な地域経済への貢献に成果があるのではないかと考えております。

課題としましては、これまで、様々な取組を立ち上げ実践してまいりましたが、一部で形骸化なども見られるようになってきました。そのため、より一層効果的な教育活動とすべく、PDCA等の改善サイクルを効果的なものに修正し、取り組んでいくことが必要となっております。

最後に、この登米総合産業高校の複数専門学科融合型と従来の総合学科との比較ですが、登米総タイプは、他の専門学科と同様に、1年次から他学科の専門科目の学びも含めた取り組みで、各学科の専門性をより広く深める、高めることができるというものです。これに対して、従前からあります総合学科では、1年次には自らの将来をじっくり考えさせ次の学びにつなげることができるという学科です。専門の学びは2年次以降、各専門教科を学ぶ系列等においてに進めていくという違いがあります。以上でございます。

(4 専門学科の検証(3)特色ある学科づくりの成果と課題) (水産高校・調理類型)

事務局 伊藤裕之

引き続き、特色ある学科づくりの成果と課題について、水産高校調理類型の成果と課題について御説明いたします。資料25ページを御覧下さい。

水産高校における調理師養成課程は、「食材王国みやぎ」の実現に向けた地域の魚食文化の継承と食に関する産業の担い手を育成することを目的とし、平成26年に設置されました。学校設定科目により、特色ある教育課程を編成し、調理に関する総合的な知識と技術を習得することは勿論、本県の豊かな魚介類や水産加工食品の特徴及び加工と貯蔵等に関して、地域産業と連携し魚食文化の普及・推進を図っております。

特に、地域の関連企業との連携による実習や外部講師の活用により、地域の食文化の継承と食に関する産業の担い手を育成しており、地元の小中学校への出前授業については、児童・生徒からも大変好評を得ているところです。また、卒業者の多くが調理関係に就職し、地域の魚食文化の継承と産業人材育成、更には、学校ブランドの強化を図っております。

課題といたしましては、調理師養成に向けた入学生の確保と人材育成が挙げられます。オリンピック・パラリンピックの開催もあり、調理関係の需要が増える中において、人材確保は急務となっております。

今後、小中学生への一層のPR活動、専門高校、大学等との連携による専門教育の推進により、系統的かつ継続的な職業人の育成を図り、地域の魚食文化の継承と食に関する産業の担い手を育成する必要があると考えます。

事務局 吉田浩二

(4 専門学科の検証(3)特色ある学科づくりの成果と課題)

(松島高校・観光科)

続きまして資料 2 7 ページをご覧ください。松島高校観光科の成果と課題について御説明いたします。

松島高校観光科は、県内唯一の観光科として平成 26 年に開設されました。観光を学習素材とした体験的な学習を通して、人との関わりの中からコミュニケーション能力を身につけ、おもてなしの心を学びます。

松島高校観光科は大学科としては、商業科に分類されます。学校設定科目として、特色ある教育課程を編成し、地元学、観光基礎、旅行業務など観光に関する総合的な知識と技術を習得し、1泊2日の観光商品「松高おもてなしツアー」を企画するなど、実践的な学びを行っております。

その他「観光ボランティアガイド」として、県外の修学旅行生や、多くの国の大使館のガイドを行っています。

実践力を身につけるため、1・2 学年の長期休業中には松島海岸付近での 2 週間にわたる販売実習、3 週間の住み込みによるホテル実習など、実践的で高度な実習を行っています。

それらの成果として、地元を知ること、郷土愛や他人を思いやる心の醸成に繋がっています。

また、観光科設置以前の松島高校にはなかった、ホテル等の観光業界への就職も見られるようになってきました。

課題としては、受入実習先の確保、教員の専門的知識の研修場所の確保、等があげられます。

また、ここ 1・2 年ホテル関係への就職が減少傾向にあります。

さらに、今年度につきましては、コロナ禍における観光ガイドの減少などによる活動制限から、地域や中学校への学習内容発信の機会が減少し、今年度の入試出願倍率にも影響が出ているのかもしれませんが。

松島高校観光科については以上です。

議長 伊藤会長

説明ありがとうございます。ここまでで、何か御質問はありますでしょうか。

最初に皆様にお伝えしていればよかったのですが、色々御検討いただくことは本日の資料 2 についてです。資料 2 の表紙をめくっていただくと裏面に目次がございます。この目次の 1 から 4 まで説明していただきました。このあと、いったんここで皆さんから今までの説明の中で確認したい点等を出していただいて、そのあとに 5、6 の定量的評価とか今後の専門学科の在り方についての検討といったところの説明をしていただいてまた議論していくということにしたいと思います。

本日の検討の目的が 1 ページにありまして、そのあとこれまでの本審議会での提言、答申等についてエッセンスを 2 番目で紹介していただきました。その後、3 番目の専門学科の学科再編の経緯について完結に整理していただいてそれを踏まえて、4 の現在の専門学科の定性的な評価ということで整理して説明していただきました。ここまでで、皆さんのほうから確認したい内容などありましたら、挙手していただければと思います。いかがでしょうか。

皆さん考えている間に、私から 1 件説明をお願いしたい内容があります。

2 3 ページで登米総合産業高校の説明がありました。この一番下に、ウ 課題というところの 1 つ目に、「形骸化からの脱却が必要」とありますが、この「形骸化」の意味が読み込めなかったのもう少し説明していただければと思います。

事務局 長田晃明

それでは、補足説明させていただきます。新しいタイプの学校ということで、地域パートナーシップなどについて、かなり深く取り組んでいたということでありまして、多くの企業や地域の方々などに参加していただき、多くの回数を重ねて実施したということをごさいました。しかしながら、今現在、落ち着いてきて、同じ議題を複数回にわたって取り扱うなど、ある程度形骸化がみられてきたということをごさいました。よって、今後は参加するメンバーの改選も行いながら、より学校の取り組みが深まるように、より効果的なご助言をいただけるような人選を進めて、回数も精選して進めていきたいということをごさいました。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。登米総合産業高校では、パートナーシップ会議という非常に特色ある学校運営の機会を作っているということです。それらがずいぶん熱心にご議論いただいていたのが、経年で考えていくと、似たような議題で、繰り返しの議論というのも見られるようになったというふうに理解しました。

皆様からいかがでしょうか。

審議会では年1回程度だったのでしょうか、これまで5ページにあります県内の産業高校を視察させていただいて、具体的にどのような授業が行われているか、また、現場での先生たちとの意見交換というのを積み重ねてまいりました。

これまで視察したところとしては、例えば、名取にある宮城県農業高校、観光科では松島高校、水産科については、石巻の方に出向いて水産高校で色々学ばせていただきました。今、話に出た登米総合産業高校にもおじゃまさせていただきました。

おそらく、次年度以降も現場に行き、色々なお話を聞くという機会はあるかと思えます。皆さんから何か確認したい点はあるでしょうか。

高橋 委員

何カ所かの報告で、入学者が減っているという報告がなされました。これは、産業高校だから減っているのかという部分と、地域の中学校卒業者が減少しているという、2つの面があると思うのですが、それが全体的に減っているから産業高校も普通高校もどちらも同じレベルで減っているものなのか、高校の特殊性から減っているものなのか、そのことについてわかるものがどこかで登場するものなのか、そこがよく読み取れなかったもので、1点確認させてください。

事務局 伊藤直美

今いただいたご質問に関する内容につきましては、この後、詳しく説明させていただきます。資料では29ページにありますので、よろしくお願ひします。

佐藤 委員

基本的なところから聞かないとわからないということがだいぶありましたので、お聞きします。

ひとつは、コース制と、類型というのはどのような違いがあるのかというところをお聞きしたいです。

さらに、総合学科の最初のところの一覧表のところには、「系列」という言い方が出てくるのですけれども、調理の「コース制」と「類型」の区別がわからなかったもので、ご説明をお願いいたします。

事務局 伊藤直美

「系列」「コース」「類型」という言葉が出てきましたが、「コース」というのは、高校入試の募集の段階で、すでにコースに分かれて募集をかけるという部分をごさいます。したがって、同じ普通科でも例えば、文系コース、理系コースというように募集を分けて高校入試を行うという場合、コースという呼び方をしております。「類型」ですが、こちらは、高校に入学してから、専門の内容に関

してさらに詳しく分けられるときに「類型」という言葉を使って分けています。例えば、同じ農業科の中でも、畜産を深く学ぶとか、作物を深く学ぶ、というときに、「畜産類型」、「作物類型」という言葉を使います。水産高校の場合には、そういった分け方の一つとして「調理類型」がある、ということでございます。

佐藤 委員

コース制というのは、学科と同じですね。つまり、定員がついているので、最初から分けられる、という意味で、類型は、水産科とか農業科の中で、メインとして主として何を学ぶか、というところだということでしょうか。

事務局 伊藤直美

そうでございます。そして、総合学科の「系列」というのは、総合学科において、1年の時には共通の学びをしまして、その中から、自分の進路とか、自分の興味から、2年生になって色々な選択科目を選ぶのですが、その時に、選びやすいようにある系統をまとめて専門教科とか普通教科の科目を配置している場合が多いです。それを「系列」という呼び方で分けております。よって、同じ総合学科の中でも2年生になって、進学用の普通教科を主体とした学びの系列を選ぶ生徒もいれば、例えば、農業関係の科目を主体とした学びの系列を選ぶ生徒もいる、ということで、総合学科でよく使われる用語でございます。

議長 伊藤会長

今、佐藤委員から出されたコースや類型、系列といった用語の説明を簡単に1枚で準備を後でしておいていただければと思います。よろしくお願ひします。
続いて阿部参事から。

阿部参事兼課長

宮城県では、高等技術専門校という職業訓練をする施設を運営しております。主に新卒の高校生が1年なり2年間勉強して産業界に旅立っていくということをしております。現在県内に、白石、仙台、大崎、石巻、気仙沼に5つあります。これが、若年者の人口減少あるいは、効果的・効率的な運営ということで、今現在、5校を1校に集約し、場所は仙台地区で、といった方向で中間案を作っている状況にあります。高校と少し似ているなという感じを受けております。

今回、各科ごとに御説明いただきまして、非常に勉強になりました。一つ思いましたのは、入学者の減少はあるのですが、関連職種への就職者の数が残念ながら非常に低いということで、それはもしかしたら進学があるからなのかどうか、あるいは高校に入る段階での本人のミスマッチというか、やりたいことと違っていた、あるいは特別強い意志がなくて入ってきたとか、そのあたりを教えてくださいいただければと思います。お願ひします。

事務局 長田晃明

それではお答えいたします。就職者の割合ですが、だいたい毎年4分の1程度という流れで推移しております。だいたい高卒者が2万人くらいおります。そのうち、4分の1の5千人くらいが、毎年就職しているという状況にあります。ただ、生徒の数が年々減っておりますので、就職者の数も年々減っております。といっても割合はだいたい変わらない、という状況でございます。

ちなみに、今年はコロナの影響で、ちょっとした変化がございました。コロナとか、過去にリーマンショックとか、東日本大震災とか、そういった場合には、進学者が増えるという傾向にありました。今回も、コロナ禍で、進学者の割合が、若干増えているという状況でございました。

それから、参考までに、就職者の中で、県内・県外を目指す生徒の割合ですが、こちらの方は今回、コロナ禍で県外に向かう生徒が少なくなってきたという傾向がございました。県内に残る割合が多くなったということでございます。

それから、目的意識のない生徒という話もあるのですが、だいたい中学生は、入ってくる段階では、普通科志向の生徒が多いということになります。はじめか

ら、私は工業を学ぶんだ、農業を学ぶんだという生徒はそれほど多くはない状況ではございますが、中には、強い志を持った生徒もおります。

それから、最初は目的をあまり持たずに専門学科に入学した生徒でも、学びが深まるにつれて自分はこちらになりたい、こういう地域と連携したいという志を持つように育て、成長するよう、そういった指導を心がけております。したがって、自分はこちらになりたいという強い思いを持って就職、それから進学などもしておりますが、地域のために、という思いを持ってやっているということでございます。以上でございます。

議長 伊藤会長

はい、ありがとうございます。よろしいですか。今、阿部参事から出た質問に関連して、産業高校の出口の部分について、就職して、さらに定着するかどうかについて、それが県内なのか県外なのか、といったところで、以前やはり定量的にデータでまとめていただいたことがあったかと思えます。

ただ、県外に出ている学生については、十分フォローはできていないという部分もあります。そういったデータの制約はありますけれども、必要に応じて、今後この審議会の中でそういったデータ等も準備していただけるのではないかと思います。ありがとうございました。

他いかがでしょうか。なければまた後でもお受けいたしますので、先に進みたいと思えます。

それでは引き続き、資料2の5と6を事務局から説明していただき、皆さんからまたお話をうかがえればと思えます。では事務局の方からご説明をお願いいたします。

事務局 柴 大輔

(5 専門教育の検証(1)①入口に関するデータ 中学生人数の推移)

私からは、今後の中学校卒業生数の推移等について御説明したいと思えます。資料は29ページ以降に、私共の方で策定しております第3期の県立高校将来構想の第1次実施計画というものがあつたのですが、そちらに掲載しているグラフ等を掲載しております。概要につきまして、資料3ということで、別途資料を用意しておりますので、そちらを御覧いただきたいと思えます。

まず、1番の中学校卒業生数の見込みと必要学級数の見込みについてでございますが、平成31年度の中学校卒業生数が、20,765人でありまして、今後多少の増減はあるのですが、減少傾向にあります。それで、令和10年には19,000人を割り込む見通しとなっているという状況でございます。

このことに伴いまして、必要となる学級数も減少していきまして、令和2年度の実学級数が359でありましたが、令和10年度の必要学級数は310となる見通しで、このままの状態ですと49学級の乖離が生じるということになります。

それから、右上の方に点線でお示ししてありますが、令和元年度の県内の出生数は14,947人ということで、これをふまえて単純に考えると、15年度の中学校卒業生数は、15,000人を割り込んでしまうのではないかと予想しております。

このように、グラフでは令和10年度までしか書いておりませんが、この先、中学校卒業生数の減少傾向がさらに顕著になっていくであろうと見込んでおるところでございます。

それから、ただいま御説明いたしました、今後10年の状況を地区別に整理したものが、2の地区別の中学校卒業生数の見込みと必要学級数の見込みについて、というところがございます。各地区ともに中学校卒業生数、必要学級数については減少傾向にありまして、各地区における高校の在り方についての検討が必要であろうと考えております。

それから資料の裏面になりますけれども、近年の学科ごとの合格者充足率の推移について、まとめてございます。さきほど御質問をいただきましたが、例えば普通科で言いますと、平成27年度に比べますと令和2年が93.7%ということで、比較的減少の幅は少ないという一方で、専門学科によっては平成27年度に比べると70%、80%というように減少幅が大きいところも見受けられるという状況でございます。

いずれにしても、生徒数の絶対数が減っているという状況でございますので、全体的に充足状況は低調であるということが言えるかと思えます。

それから、令和3年度の高校入試におきましては、令和3年3月の中学校卒業生数が近年でも実は最も少なくなる年であるということで、全日制の全体倍率が1倍を切ったという状況です。次年度の中学校卒業生数については、やや回復することが見込まれるというところはございますが、冒頭にお話しいたしましたとおり、今後のトレンドとしては、減少傾向となっていくということで、数年後にはさらに厳しい状況が予想されると考えております。ただいま御説明いたしました状況であるとか、地域の状況などを踏まえながら、各地区における高校の在り方を今後検討していく必要があるであろうと考えているところでございます。私からは以上でございます。

事務局 伊藤直美

(出願倍率について)

それでは、また、資料2の37ページに戻っていただきたいと思えます。今、中学校卒業生数の減少についてご説明いたしました。そして、37ページは、高校入試の出願倍率だけをピックアップして表にしたものでございます。

こちら見ますと、特に、平成31年度と令和2年度の間には二重線が引いてありますが、高校入試の制度が変わりまして、平成31年度までは、前期後期の入試がございました。1月末と3月に2回ありましたが、令和2年度から1本化され、3月に1回という高校入試になっております。

その影響もあつたのかもしれませんが、ここを境に、専門学科の倍率低下が著しくなっております。もちろん、中学生の人数が減っているということもございますが、看護科以外は、すべての専門学科で令和2年度以降は1倍を下回っているという状況です。

そして、先ほど御質問にもありましたが、その要因は何かということでは色々な要因が考えられますが、手掛かりとなるものとしまして、38ページを御覧ください。先ほど御説明にもありました第3期県立高校将来構想の策定の中で、県立高校に対する県民のニーズ等々の調査を行いました。その中で、「高校選択で重視することは何か」という質問に対して、「学力のレベル」という回答が最も多く、続いて「高校卒業後の進路や就職等の進路」の回答という結果になりました。学力レベルや高校卒業後の進路といったところについて、中学生が重視しているところ、あるいは、高校生も入るときに同じように重視していたと回答しています。

また、2番目の「高校の学習で希望すること、重視すべきと思うことは何か」という質問につきましては、全体では、「就職に役立つ知識や技術に関する学び」が多く、その他、「基礎学力の向上につながる学び」、「大学受験に必要な学び」となりました。これが参考になる部分かと思えます。

(5 専門教育の検証(1)②教育活動に関するデータ)

続きまして、専門学科を取り巻く状況として定量データとして、保護者そして生徒対象に行っている調査からいくつか御紹介したいと思います。

まず、39ページは、学校評価になります。こちらは全県立高校で毎年実施しております。生徒・保護者を対象として、全学年で実施しております。そして

今回は、専門学科の様子がわかるようにするために、左の項目にあります通り、学科ごとに学校を分けて集計をしました。

その結果、質問項目の一番左、「学ぶ意欲を引き出し、学力を身につけられるような授業が行われている」では、農業科、工業科、水産科、総合学科で80%以上が肯定的回答をしているというように、専門学科で高い評価になっていることがわかります。

そして次の40ページを御覧ください。今度は、学校基本調査という文部科学省で行っている調査の中からひろったデータでございますが、専門学科の恵まれた状況を示すデータということで、ここで御提示しました。

教員一人当たりの生徒数は、専門学科の方が少ないということになります。また、1学級当たりの本務教員数は多いということになっています。これは、すなわち、専門学科では生徒ひとりひとりに対して、きめ細かい指導が行える環境にあるということになると思います。

また、41ページは、学力状況調査という、公立高校の1、2年生の生徒を対象に実施している、学力試験そのものもあるのですが、その中で、学習に対する意欲などを見るための質問項目がいくつかございます。その中から一つピックアップした質問でございます。

「学校の授業の内容がどの程度理解できますか。」という内容ですが、こちら各学科に分けましたところ、どちらも、1年生の時には50%代、2年生になると、40%代、30%代になるということで、どこの学科も1年生から2年生に上がるにしたがって、理解度が低下しているということがわかりますが、その、1年生から2年生になるときの差を学科別に見たところ、農業科、商業科、水産科で10%以上減少しているということがわかります。

この結果については、問題視しておりまして、2年生、3年生に上がるにしたがって、専門的な学びが難しくなってくるのですが、その内容をしっかり理解させるような授業展開、教員側の工夫というものが必要なのではないかと考えております。

次に42ページを御覧ください。こちらは、インターンシップの実施状況調査です。

1つ目の表は、全体的にどれくらいの学校がインターンシップを実施しているかについてですが、全体的には全日制では7割程度の学校がインターンシップを実施しております。2つ目の表ですが、職業に関する学科については、全日制では100%実施しているということがわかります。そして、3つ目の表ですが、普通科の場合は、年によって差がありますが、5割から6割に達するかどうかというところでございます。また、その実施方法については、4つ目の表です。参加形態ということで、職業に関する学科は、学年全員が参加している、つまり実施学年は1年生だったり2年生だったり、学校により異なりますが、全員参加している、ということになります。普通科の場合は、全員参加している学校は40%くらいになっております。つまり、学校としては参加しているけれども、全員ではないということになります。

また、43ページは外部連携実施状況ということで、社会人講師による出前授業や地域との連携等について、各学校の実施状況を調査しましたところ、1校当たりの平均実施件数は普通科よりも職業に関する学科のほうが、幾分多いという結果になっております。

(5 専門教育の検証(1)③出口に関するデータ)

続きまして、44ページ、出口に関するデータについてです。ここで御覧いただきたいのは、専門学科はやはり、就職者の割合が高いということです。家庭科と総合学科以外は50%を超えております。

また、学科別の産業別就職割合が45ページにございます。産業別で言いますと、製造業の就職が最も多いところが5つの学科（農業、工業、商業、総合学科、普通科）ということになっております。

そして実際の求人がどんなものが来ているのかというのが、次のウの表でございます。これは、昨年3月に卒業した卒業生に対する高校生求人の方でございまして、やはり、ものづくり系企業への誘致活動が進んでいることから、製造関係の職業の求人が多いことがわかります。

それを受けまして今度は46ページです。各専門学科の産業別就職割合が一番上の表でございまして。やはり、学科の特性を生かして、例えば、商業科は事務従事者が多いとか、ということでは各学科の学びの特性を生かした職業への就職にも幾分反映されているかなと思っております。

そして46ページ下のエは、学科別の就職希望割合と内定率を表した表となっております。学科では工業科が就職希望者の割合が高いということ、それから、商業科、家庭科、福祉科では専門の学びを生かしてさらに上級の学校へ進学するケースも多いということ、そして、就職内定率は、98%から100%と高い内定率となっております。

進路に関する状況としては、以上になります。

(6 今後の専門学科の在り方についての検討(1)検討の視点)

以上、色々な定性データ、定量データを含めまして、専門高校、専門学科について現状を御説明いたしました。今後、諮問をするにあたって、どのような視点で考えたらいいか、の一つの考え方の例として、47ページのところを簡単に御説明したいと思います。

今後の専門学科の在り方に関しまして、検討する視点としては、3つのポイントがあると思っております。

まずは少子化への対応。中学生の人数が少なくなるということ、そして教育の機会均等に配慮した高校配置の在り方といった部分が大事な視点かと思っております。その際には、地域の特性や社会変化に対応した特色ある教育の実践が必要であると思っております。地域産業についてはのちほど御説明いたしますが、その部分をしっかり反映させた形というもの、大事な視点であると思っております。

また、生徒の多様性ということに関しましては、例えば工業が好きだから、農業が好きだから、だけではない、色々な事情を抱えながら、入学というケースも増えております。定時制・通信制課程の専門学科は少ないですが、課題も多様で、複雑なものになっております。共生社会の形成に資するという点では、インクルーシブ教育システムの充実、という点で、障がいを持った子供たちの受け入れということも考えなければいけないのかもしれない、そういった視点もあるかもしれません。

それから、3つ目の産業構造の変化、社会動向の変化への対応という点につきましましては、一番大きなものとしまして、このコロナ禍による部分も大きいですが、グローバル化、情報化社会、society5.0といった社会の到来により、学校もそれらへの対応が始まっております。特に、職業教育に関しましては、「スマート専門高校」の実現ということで、文部科学省でも力を入れているところでございます。こういったデジタル化への対応、オンライン化への対応といった部分に関しまして、学校としても対応していかなければならないのではないかと考えております。

事務局 長田晃明

(6 今後の専門学科の在り方についての検討(2)学科別の今後の在り方)

次に、学科別の今後の在り方について御説明いたします。資料は48ページでございまして。こちらの方では今後の在り方と書いておきながら、データだけをお

示して御意見などいただきたいと考えております。

まず、地域の産業構造と、現在の設置学科についてですが、まず、真ん中の囲みには各地域の産業構造をお示ししました。算出方法としましては、囲みの上段にあります指定地域における事業所の従業員数を抽出しまして、各産業の割合と考えてみました。

一番上のグラフが、地域の産業割合ということになります。割合の大きい産業から順に左側から挙げてあります。各地域で表す産業の順番というのは、それぞれの地域で異なるということを申し添えておきます。

例えば、製造業が一番左になるということではございません。一番多い順に並べ替えたということでございます。

それから、真ん中の棒グラフ、こちらは、宮城県全体の平均値であります。一つ一つのデータは、各地域とも同じものなのですが、先ほど申しましたとおり、各地域の割合の大きいものからそろえておりますので、順番が入れ替わっているということでございます。

一番下のグラフは全国平均になりますが、これも同様でございます。

各地域の特徴については、資料のとおりであります。全体的には、仙台を含む中部地区、石巻地区、および本吉・気仙沼地区においては、卸売業・小売業の割合が最も大きく、その他の地区においては、製造業の割合が大きいという状況でございました。それに続く産業としましては、地区ごとに医療・福祉であったり、建設業であったり、特色の違いが見られるということでございます。

それから、現在、各地区に設置しております専門学科については、資料の下の方に挙げておきました。

今後は、この地域ごとだけではなく、もっと広い地域でどのような専門学科の学びを再編していくか、ということが課題になります。今回の資料はその足がかりとして作成いたしました。違う見方の資料についてもできるだけ対応してまいりたいと思っておりますので、御希望があれば、お話しいただきたいと思っております。

次に、資料55ページに移ります。こちらは、専門学科の配置の方法について、一例をお示ししてあります。

まず、単独専門型は、一つの専門学科を有する学校でございます。宮農とか県工が当てはまります。

次は、複数の専門学科を有するものでありまして、先ほどの登米総合産業高校の形であります。

その次、総合学科は村田高校、迫桜高校などがございます。

それから、専門プラス総合学科型というのは、小牛田農林高校において農業学科と総合学科を併設しております。

それから、分校型としましては、もう閉校しましたが、旧鶯沢工業高校の最後の創造工学科、こちらが岩ヶ崎高校の鶯沢校舎として分校で存続させたという形であります。

次の普通科併設型と普通科対応型については、資料のとおりであります。以上でございます。

議長 伊藤会長

はい、どうもありがとうございました。非常に多岐にわたるデータが準備されております。只今の説明で、皆さんから何か御質問や御意見がありましたら出していただければと思います。

ポイントの一つは、前段のほうでは特に様々なデータで現在このような特徴があるということかと思っております。47ページに次年度以降、この審議会で専門学科の在り方を検討する上で、現在事務局から①から③まで3つの視点で検討してはどうかという提案がございました。これ以外に、重要な視点があれば、今日

に限りませんけれども、また後日でも結構です。皆さんから出していただきたいということ。それからそのあとでそれぞれの県内をいくつかの地域に分けたときに地域を構成している産業の割合を見たときに、今後の産業高校の配置として、タイプをいくつか今考えられるのだけれど、そういったタイプ分けをしながらプランを考えていくということについて、どう考えるか、というその2点かと思えます。

今野 委員

47ページの今後の専門学科の在り方についての検討の部分の③のところです。社会の動向、産業構造の変化ということで、種々挙げられているわけですが、グローバル化、情報化というのは、これはもう、ごもつともでございます。例えば、水産学科の問題だとか、これまで状況を拝見させていただきますと、今、水産関係の企業さんは、みんな原油不足などで非常に苦しんでいらっしゃる、そしてコロナで非常にダメージを受けていらっしゃる。何とか、いろんな施策で養殖、これは海上、それから陸上でしょうかそういった部分の御意見なども沿岸部の方から聞くのですが、そういった環境の変化というふうにまとめてしまっているのかどうかわかりませんが、そんな視点も一つあってもいいのかな、という感じもしました。感想でございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

後藤 委員

資料の47ページの今後の専門学科の在り方についての検討の②のところ、「不登校生徒及び中途退学者の状況」ということで、「全国平均値を上回っている」と書かれていますが、これが、普通科の生徒さんと、専門学科の生徒さんの差異があるのかということが、もしわかればお願いいたします。

議長 伊藤会長

その点、事務局で回答できますか。

事務局 伊藤直美

不登校のデータはあるのですが、学科別ではまだ分析しておりませんでしたので、可能な範囲で次回、用意できるものがあれば、ご提供したいと思っております。

議長 伊藤会長

他はいかがでしょう。

宮原 委員

今日は色々御説明ありがとうございました。御説明をうかがって、全体的な印象ですけれども、ひとつは、高校の名称について、「総合」それから「専門」といった整理の仕方をしていますが、中学校の生徒さんや保護者の人たちにとって、これはわかりやすい表記になっているのだろうか。「総合」といっても、中身が良くわからない。「専門」といっても実際にはわかりづらいのではないのでしょうか。教育の専門家からするとこれは普通の表記の仕方、整理の仕方かもしれないけれども、受験する身になってみると、そこが実はちょっと引っかかってしまうようなところがあるかなと思いました。

それから、今日御説明いただいた部分は、各学校の特徴やカリキュラム、生徒さんの動向というのは大変丁寧に調査されて御説明いただいているのですが、各学校の教育を担う教員の方たちに関する状況の御説明というのがほとんどなかったのです。学校の教育の質を考える上で、教員の担う部分というのが大変大きいと思うのです。

私の知り合いで、産業系の高校の教員がいますが、自分なりに教育の工夫をして頑張ってきたけれども、転勤先で自分がこれまで培ってきたことが活かさない状況となり、何年かその高校にいななければならない、そういったお話も聞いた

ことがありました。産業系の高校で特殊なスキルを持って教育にあたる先生の転勤の在り方、教員のキャリアを生徒さんにいい形で還元できるような転勤のルーティーンみたいなものの検討も必要ではないかと思いました。

それから、もうひとつ出口の問題について述べたいと思います。現在の就職先として、民間企業が主な進路となっていますが、県として産業教育を推進していくのであれば、その意思をもう少し強く表してほしいと考えます。例えば、新たな出口として、県庁の職員や県の産業技術センターの職員などに産業系高校卒業生に合う職種を創設して、産業技術系の高校生たちが、公務員であるとか、公的な立場を目指せるような場を作ってもらおうという、少し思い切った形で取り組んでいただけないかと思っています。進学した高校で、勉強を頑張る、高い専門スキルと誇りを持って卒業していくための、プロセスや仕組みの創出を目指していただきたいと思います。現行の制度を変えていくことで、少しでもそういったことが推進できるのなら、この度、コロナであるとか少子化であるとか社会が非常に大きく変わるときに、県としても何か大きな変革をしてほしいなと思いました。

議長 伊藤会長

非常に貴重な御意見ありがとうございました。事務局の方でもう一度それを整理していただければと思います。ほかにはいかがでしょうか。

徳能 委員

大変よく資料をまとめていただいて、私も内部の人間ですけれども、こうやってまとめて資料を見ると、ああなるほど、というふうに大変よくわかりました。ありがとうございました。内部にいる人間なので、あまり色々言いづらいところがあったりするのですが、全体的な生徒数の減少ということに対しては、統廃合とか、学級減とか、もう仕方がないことだと私も思っていて、今後色々学校を再編するときに、今日の資料を見れば見るほど専門学科はいらないのではないかと、定員が割れているのであれば必要ないのではないかとというような、数だけをとれば、そのように見えてしまう気がするのですね。

ただ、こうやって、産業教育審議会ということで、いろいろなお立場の方から色々なご意見をいただくこういった場を設けていただいたということは、やはり、専門教育、産業教育をきちっと県としてもやっていかねばならない、そういうことだと思いますので、今後の議論の中で、専門学校が、すべての子供たち、中学生が希望を持って入れるような、そういう魅力的な学校になるような再編統合であったり、色々な取組を考えていただきたいというか、私も考えていきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいということでございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。ほか、いかがでしょうか。

梅津 委員

37ページの出願倍率についてですが、二重線のところで制度が変わったことによって、定員割れ等が起こってきたという御説明がありまして、私は仙台市内におりまして、周囲にも公立高校の情報等も割と入ってくるような環境にあるのですが、私立の高校が、無償化・減額化して、やっぱり私立に流れていく子供たちが非常に増えたなという印象ですね。

私立の合格発表が終わった瞬間、模試を受ける子供の数がガクッと減ったりとか、明らかに私立はあの手この手で非常に魅力的な受験項目、受験のシステムを加えたりして、やはり普段生活していてもそういう話題が出てきますし、公立の普通科ですら、定員割れの傾向が見えているということは、やはり、こういった地方の、せつかく特色のある、ユニークな公立高校があったとしても、やはり私立のそういったいろいろな戦略の影響を受けているというのは事実なのかなというのが、印象にありました。だからどうだというわけではなくて、そういう

印象を持っているということです。

あともう1点、徳能先生がおっしゃられたように、統廃合が今後免れないというのは確かに、この数を見るうえでは、やむを得ないのかなと思います。いろいろな資料を見せていただいた中で、個人的な意見ですけれども、登米総合産業高校みたいないくつかの学科を統合した学校というのは、個人的には非常に魅力的に思いますよね。教員の配置とか非常に難しいとは思いますが、やっぱり、グローバルで多角的な子供たちを育てたい、といえば、一つの科ではなくて、いろいろな科の子供たちが行き交うとか、色々な先生がいらっしやるとか、あわよくばちょっと別の学科の勉強もできるとか、そういった高校というのは、非常に魅力的に見えますし、万が一ちょっとこの適性があるかなと思っても、方向転換が途中でできるとなると、かなりの選択肢も広がりますし、そういった視野を持った卒業生が社会人として出ていく意味合いでも、社会のニーズも非常に高いのかなと思ひまして、そういった形の統廃合・統合という形も非常に魅力的に感じました。

議長 伊藤会長

はい。どうもありがとうございました。

他にはいかがでしょうか。

佐藤 委員

色々説明ありがとうございました。特に47ページに3つ書いてありますけれども、これは全く、専門学校・専修学校でも同じ状況なので、人数は減っているし、高校を卒業した学生の多様化も進んでいるし、社会の変化にも追いついていかないと、全然学生の期待に応えられないというものもあってですね、同じ環境にあると思っています。また、先ほど宮原委員がおっしゃった、これだけタイプ別ができる中学生は選べない、と僕も古い親ですけども普通高校と実業高校、商業、農業、工業しか知らない世代なので、これだけ色々なタイプがあると、子供自体も選択するのが難しいし、親も非常に難しい。とりあえず普通科へ向け、という話になってしまうということではないかなと思うのですね。そのために、専門学科を持つ高校がどう魅力を発揮するか、ということになっているのだと思います。

これだけ選択肢があると非常に難しいと思うのと、専門学校で入ってくる学生を見ますと、商業科を出たからビジネスに来るのではなくて、商業科を出て建築に入ってくる、土木に入ってくるとかですね、福祉を出たからもう一回福祉の勉強をするのかなと思ったらそうではなくて、医療系に入る、近いことは近いのですが、高校でやってきた課程とはつながらないで専門学校の色々な科に入ってくることも結構多いのですね。専門学校としては来てくれることがうれしいことなので、気にはしなかったのですが、今よく考えてみると、どうしてだろうと、一瞬思ったのですね。

高校でも商業をやってくれば、専門学校でもビジネス、高校で工業をやってくれば専門学校でも建築・土木というふうにするなりいくのかなということではないということに対してどうしてだろう、ちょっと調べてみようと思ったのですけれど。

そういうところもあって、高校生の出口の問題が先程あって、確かに専門学校も就職100%だけではもうだめで、どういう出口があるのか、出口にどういった到達目標があって、それをどれだけ確保したからこういう出口があるのだよということを言わないとだめになってきているので、そのようなことも専門学校として今一生懸命考えているところです。高校のこれからの専門学科のあり方になりますけども、そういったことも考えていければいいかなと思って聞いておりました。どうもありがとうございました。

議長 伊藤会長

はい、ありがとうございます。他にございますか。よろしいでしょうか。今日は後半の方で非常に有益な御意見等がいただけたかと思えます。

私の方で感想めいたところもありますが、日本の社会が進んでいるのか遅れているのか、よくわかりませんが、20年ほど前にオランダで生活していたときに、中学・高校とか大学へそのままストレートに行く学生はそれなりにいるのですけれども、中学で卒業して、ケーキ職人になっても、途中で土木とか機械に目覚めると働いている途中からまた高校に行くのですね。随分とそういう教育と社会との連携というのが日本と違うなと思いました。

そういう意味では、多様性・ダイバーシティに対応していくという産業教育の仕組みというものも考える時期なのかなと思いました。それがリカレント教育とよくいわれるものの中の、若手のリカレント教育といったところになるのかなと。

それからこの1年間、皆さんも色々ところで授業がオンラインになって、こちらのオンラインでもライブ配信でやっているものとオンデマンド配信でやっているのもので、学生の成績などみんなそれぞれまだ全然分析はできていないのですが、オンデマンド配信の授業を受講している学生というのが、意外とちゃんと聞いてなさそうだと。みんな早送りして最後、試験のレポートでもそれだけやっているようだ。

中には、ある先生は自分のしゃべったところを必ず書かせるようなレポートを出していたら、全然書けていない、と。オンデマンド配信の授業って何なのだろう、ということになっています。

たぶんこれからの産業教育でもそういったこれまでの授業の形式とは違って、そういったICTを活用しての教授方法といったものも検討する時期なのだろうなと思います。

特に私の専門分野の農業に関連すると、簡単にパートタイムで近くにいる人に作業をやらせようというときに、前の日にYouTubeで明日こんな作業をやるよ、手順はこうだよと見せておくと、非常に作業効率が高まるとか、そういうことがすでに現場では活用されている状態であって、それは高校教育の場でもたぶん活かされてくるのだろうなと。

そんなふうに考えていくと、今までの産業教育の進め方ですね、器そのものもそうですし、先ほど宮原委員の方から出た教員のところから切った場合、どのような産業教育が必要なのか、とか、そういう視点で、1年ほどこれから皆さんといろいろ議論が必要なのかなと。

47ページの3点の検討の視点、これはこれで大切だけれども、これにとらわれず、言い方が非常に雑なのかもしれませんが、これからの産業教育を考えたときに、一度白紙ベースで出口からもう一回見直して構築するとこんな姿になると、いったようなことまで、気持ちの中ではそういった気持ちで検討していく必要があるのかなと今日感じさせられました。

その点、今日また、事務局に宿題という形で投げさせていただきますけれども、そういった今日の皆さんから頂いた御意見をもとに、今後の検討の仕方を相談させていただければと思います。

本日、皆さんから貴重な御意見を頂きましたので、今日はこれで終わらせていただきますと思います。御協力どうもありがとうございました。

進行を事務局にお返しします。

進行
事務局 伊藤裕之

伊藤会長、どうもありがとうございました。

それでは、ここで、会の冒頭にございました開会の御挨拶を、宮城県教育委員会教育長伊東昭代に代わり、高校教育課長、遠藤浩が申し上げます。

挨拶
高校教育課長
遠藤 浩

皆様方、今日はお忙しいところありがとうございます。冒頭に御挨拶すべきところだったのですが、議会の方が長引いてしまいまして、本当に申し訳ございませんでした。

途中からお話しに参加させていただいて、今日の産業教育審議会はキックオフの会議と思っているのですけれども、改めてその広がり具合、議論の広がりや深まりがものすごく大きいものがあるなど感じました。

世の中の的には、生徒・保護者、小学校、中学校、高校とその生活の変化がひとつの軸としてあって、さらに産業構造の変化があり、それに対して専門高校がどうジャストフィットしていけばいいのか、というそのところを考えていかねばいけないと思っております。世の中のニーズがあるのに高校が違う方向を向いていたというのでは話が難しくなりますし、逆に指摘も頂いておりますように、高校がやっていることがわかりにくくてもなかなか人は入ってこない。そうだとすると、本来的には良い循環に持っていかなければいけないその循環がうまく作れなければ、学校は世の中の役に立っていないというような感じに見えてしまいますので、ここからスタートということになりますけれども、先生方の御経験あるいは御意見をいただいて、本当に実際に高校がどうあるべきか、そこを様々な角度からお話しをいただいて、宮城県や、全国にも波及しますけれども、いい学校のあり方をぜひ探っていければとてもありがたいと思います。

本当は冒頭お話しすべきところだったのですが、最後になってしまいまして、大変申し訳ございませんでした。今後も引き続きよろしく願いいたします。

5 その他

5 その他 に入ります。事務局からお願いします。

事務局 伊藤直美

令和3年度の審議会につきまして、資料2の56ページにありますとおり、年4回または5回程度の開催を考えております。新年度になりましたら日程について委員の皆様へ改めて御案内いたします。

なお、本日の審議において、発言しきれなかったことやお気づきの点がございましたら、お配りしました意見用紙にご記入の上、3月19日（金）までにファクシミリ又はメールでお送りいただきますよう、お願いいたします。以上でございます。

進行
事務局 伊藤裕之

その他、委員の皆様から何かございますでしょうか。

伊藤 会長

来年度は、最初は6月2日ということで仮に押さえておいた方が良いと言うことでしょうか。

事務局 伊藤直美

もし皆様の御予定が大丈夫であれば、1回目はこの日程でということ考えております。

進行
事務局 伊藤裕之

他にございませんか。

本日は大変貴重な御意見をいただきありがとうございます。以上をもちまして、令和2年度 宮城県産業教育審議会を閉じさせていただきます。どうもありがとうございました。

